

「禪 ZEN」

★★★

2008（平成20）年12月2日鑑賞<試写会・梅田ブルク7>

監督・脚本：高橋伴明
 原作・製作総指揮：大谷哲夫『永平の風 道元の生涯』（文芸社刊）
 道元／中村勲太郎
 おりん／内田有紀
 北条時頼（鎌倉幕府の若き執権）／藤原竜也（友情出演）
 寂円、源公暁（源実朝の甥）／テイ龍進
 俊了／高良健吾
 義介／安居剣一郎
 懷奘／村上淳
 波多野義重／勝村政信
 如浄（道元に悟りを開かせた宋の天童山の禅僧）／鄭天庸
 浙翁／西村雅彦
 公仁／菅田俊
 松蔵（おりのん）の夫）／哀川翔
 老僧／笹野高史
 伊子（道元の母）／高橋恵子
 2008年・日本映画・127分
 配給／角川映画

<道元禅師の一生がはじめて映画に>

「日本で最も有名な僧侶（仏教者）のベスト3は？」と聞かれたら、1位が親鸞、2位が日蓮、3位が空海といったところ・・・？そして、その後に続く4位が道元、5位が最澄・・・？

そんな有名度に対応してトップ3は何度も映画に登場している。例えば、①親鸞は、『親鸞』（60年）や『親鸞 白い道』（87年）、②日蓮は、『日蓮と蒙古大襲来』（58年）や『日蓮』（79年）、③空海は、『空海』（84年）や『曼荼羅 若き日の弘法大師・空海』（91年）など。ちなみに、親鸞の8代目の直系の弟子蓮如を描いた『蓮如物語』（98年）もあるが、親鸞と蓮如がポピュラーになるについては、作家五木寛之の功績が大きい。また、空海と最澄は平安時代初期の8～9世紀に活躍したほぼ同期生。そして、親鸞、道元、日蓮は13世紀前半に活躍したほぼ同期生（20～30年ずつズレているだけ）。ところが、親鸞、日蓮と対比されるべき僧侶で、曹洞宗の開祖道元禅師が映画に登場するのは、『禪 ZEN』が最初らしい。

そんな、映画初デビューした道元禅師の姿を具体的に表現するのは、1981年生まれという歌舞伎界の次世代を担うホープ中村勲太郎。私は彼を『人情噺 文七元結』（08年）ではじめて観たが、主役として登場するのは『禪 ZEN』がはじめて。キリリとした佇まい、圧倒的な姿勢の良さ、セリフ回しのうまさなどはさすが歌舞伎界のホープだが、1223年の入宋シーンから始まる「本編」のシーンをみてビックリしたのは、彼が流暢な中国語をしゃべっていること。プレスシートによると、単にセリフを丸暗記するのではなく、イロハからきっちり学びながら半年間でマスターしたらしいが、さすがと感心。私もイザとなればそれくらいの努力をしてマスターしなければ・・・。

<なぜ今道元が？時代的共通点は？>

アメリカ発の金融危機が世界的に広がる中、今のアメリカや日本を1929年の世界恐慌時代のアメリカや日本と対比する論調が目立っている。また、それがあの田母神俊雄論文と結びつくと、日本で1920年代後半から顕著になってきた軍部台頭の歴史とも重なることに・・・。

それと同じような論調（？）を展開するのが、プレスシートにある駒澤大学総長で原作者、製作総指揮の大谷哲夫氏の「今、なぜ禪？そして、道元なのか？」という解説。すなわち、今の日本を特徴づける心の荒廃、社会の荒廃は、「将来に対する、目に見えない閉塞感の中の不安」であり、そこで失われたものと向き合うため仏教への関心が高まっているという論理だ。私はこの解説に全面的に同調するわけではないが、「今、なぜ禪？そして、道元なのか？」という問いかけが、混迷する今の日本社会の閉塞感を打開する一つの処方箋であることはたしか。したがってこの映画をみるについては、13世紀前半すなわち源頼朝がひらいた鎌倉幕府が源頼家、実朝と三代続いた後、北条家に実権が移行していったあの時代状況と、現在の日本の時代状況を対比する目をもちたいものだ。

<道元さんも、書くのが大好き・・・？>

私は中学高校時代の日本史で、<曹洞宗の道元＝正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）の著者>と丸暗記した記憶があるが、もちろんその中に何が書かれてあったかについてはノータッチ。しかし、日本に戻ってきた道元が暇さえあれば（？）筆を取りモノを書いている姿を見ると、今の私にそっくり・・・？つまり、説法したり、弟子を教育したり、お寺の経営に苦心したり、が本来道元の基本的な仕事だが、きっと彼はそれ以上に書くことが大好きだということ。

ウィキペディアによると、「（仮字）『正法眼蔵』は、道元の禅思想を表現するために、語録から特に公案で使われてきた重要な問答を取り出し、それに説明注釈する形で教えを述べている。これの種本が（真字）『正法眼蔵』であり、10種類ぐらいの禅語録から道元からみて重要な300則の禅問答を抜き出しているが、ただそのまま写すのではなく、その段階で既に道元の思想から若干の変更が加えられていることが研究の結果分かっている」とのこと。そしてまた、「現在では、旧稿75巻＋新稿12巻に整理され、学会では合意されている」とのことだから、そのボリュームは膨大なもの。2002年6月から始まった私の『シネマルーム』の出版は6年半で20冊となったが、道元さんにはまだまだ及ばないので、これからは彼を目標に頑張らなくちゃ。

<紅一点も、えらい頑張り！>

「紅一点」といい切ってしまうと、高橋伴明監督の妻であり映画の冒頭に登場する道元の母伊子を演じる高橋恵子に失礼だが、これはちょっとしたプロローグだけだから事実上、紅一点には偽りなし。この映画の紅一点は内田有紀。若い頃は目が大きく丸顔の、私の大好きな可愛い子ちゃんだったが、彼女も30歳を過ぎて次第にいい女に・・・。

そんな女優内田有紀の良さを私が再認識したのは『クワイエットルームにようこそ』（07年）。その評論で私は、「北野監督の『監督・ばんざい！』（07年）で、出番は少ないものの、大きな存在感を示したあの美人女優の内田有紀が、この映画では仕事も恋愛もうまくいかないフリーライター明日香役で登場。内田有紀は、大量の睡眠薬とアルコールを一気に飲んだため、自殺未遂とまちがわれ、『同居者の承諾』によって『クワイエットルーム』に入れられたヒロイン（？）明日香役を『怪演』している。まずは、9年ぶりに主役として登場した、この内田有紀の怪演に注目したいもの。」と書いた（『シネマルーム16』442頁参照）。

その内田有紀がこの映画では、少女時代に道元に救われ、厳しい時代状況の中で遊女に身を落としながら乳飲み子と夫を養い、後に道元に帰依して出家するという幅広いキャラの女おりんをえらく頑張って演じている。したがって、中村勲太郎だけでなくそんな内田有紀にも注目！

ちなみに、怪我のために働くことができず、ヒモみたいな存在ながら夜だけはタダでおりんの身体に乗っかる出来の悪い夫松蔵を哀川翔が演じているが、私が思うに、彼は主役よりもこんな役の方がピッタリ・・・？

<やっぱりバトロンは大切>

既得権益をむさぼる努力が変革を旗印とした新興勢力を毛嫌いし、抑圧しようとするのは当然。そしてそんな姿を目の当たりにしたのが、2001年4月から2006年9月まで続いた小泉改革の5年半。

日蓮に対する鎌倉幕府の弾圧もかなりのものだったが、「弁道」に精進し、従来の宗派を否定した道元の教えが、比叡山から「邪道」の烙印を押されてしまったのは仕方ないところ。そこで正義の見方、月光仮面として登場するのが、六波羅探題の波多野義重（勝村政信）。この映画では、なぜ彼が道元の教えに帰依しているのかは明らかにされず、苦境に陥る道元を救う姿のみ描かれる。比叡山の悪僧公仁（菅田俊）らによって、やっと軌道に乗りかけてきた深草の興聖寺が焼き討ちにかけられた後、義重の領土である越前への移動とそこでの永平寺の建立を訴える姿は感動的。さらに、毎夜怨霊に苦しめられている時の執権北条時頼（藤原竜也）の魂の救済を懇願したのもこの義重だ。

個性と個性のぶつかり合いは、吉とできればありがたいが、凶と出れば大変なことになる。それぐらいのことは義重もわかっていたはずだから、この仲介役は大きなリスクを覚悟していたはず。結果はオーケーだったが、もしあの場で時頼が怒りに任せて一太刀のもとに道元を斬りすてていたとしたら・・・？それは「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら・・・」という歴史上のifと同じだから、言いっこなし！

<字幕をつけた方が・・・>

鎌倉時代の高僧道元の生涯を描くについて難しいのは、その教えの中のでてくる専門用語やその概念をどうやって観客に理解させるかということ。禅や坐禅はわかるし、「身心脱落」（しんじんだつらく）は何となくイメージできるが、「半跏趺坐」（はんかふざ）という坐禅のやり方（右の足を左の腿に載せる、または左の足を右の腿に載せる）や、「只管打坐」（しかんたざ）という曹洞宗の根本思想（釈迦に倣い、ただ坐禅にうちこむことが最高の修行である）はとてもじゃないが、理解不能。だって総理大臣ですら、「頻繁」（ひんばん）、「未曾有」（みぞう）、「踏襲」（とうしゅう）の漢字を読めず、（はんざつ）、（みぞう）、（ふしゅう）とまちがったりする時代なのだから。

その他、道元が弟子たちに語るさまざまな仏教用語は難しい漢字ばかり。そしてそれは、①達磨宗から道元に帰依し、道元亡き後曹洞宗2代目を継いだ懷奘（村上淳）、②三代目を継いだ義介（安居剣一郎）、③道元の正師で、宋の天童山の禅僧如浄（鄭天庸）亡き後、宋から日本に渡り、道元とともに日本での曹洞宗の普及に尽力した寂円（テイ龍進）などが語る言葉も同じ。したがってこれらの専門用語については、邪道ながら、字幕でその漢字と意味を解説した方がよかったのでは・・・。

<あの時代の日本史はメチャ面白い>

この映画には20歳の若さで執権となった北条時頼が登場する。そして、満月の月を見ながら道元と「禅問答」をくり広げるシーンが中盤のハイライト。その問答の中で、「執権とは権力を執行する者」というセリフが登場するが、源頼朝、頼家、実朝と3代続いた鎌倉幕府のあの時代に、なぜ執権という官職が・・・？

他方、この映画のはじめには、鎌倉4代将軍を目指す野望を秘めた、道元の親友である源公暁（テイ龍進）が登場する。3代将軍実朝は、「大海（おほうみ）の磯（いそ）もとゞろによする波 われてくだけてさけて散るかも（割れて砕けて裂けて散るかも）」（金槐和歌集）と詠んだ当時の文化人だが、この実朝を鶴岡八幡宮で暗殺したのが、公暁。

道元死亡の20年～30年後に訪れたのが文永の役（1274年）と弘安の役（1281年）だが、この蒙古来襲当時の執権は北条時宗。こんな波瀾万丈の、あの時代の日本史はメチャ面白い。そして、そこに道元の視点を加えれば、なお興味深いはず・・・。

<こんな新発見も>

織田信長が比叡山を焼き払い、坊主共を皆殺しにしたのは1571年だが、それは一体なぜ？他方、道元が生きたのは1200～1253年だが、比叡山の悪僧公仁の姿を見ると、この時すでに比叡山の一部の不良坊主たちは酒を飲み女と遊びさらにはなぎなたで武装するなど、悪事の限りを尽くしていたようだ。そんな比叡山の不良坊主たちは、多分世俗の者と同じようなモノを食べていたのだろうが、永平寺の道元たちは肉魚は厳禁だったはず。

2008年12月3日付毎日新聞の一面を使ったSUNTORYの広告は、日本の精進料理を体系化したのが『典座教訓・てんぞきょうくん』という書物で日々の食事の大切さを説いた永平寺の道元であることを紹介し、ごまの栄養の大切さを解説している。これは、SUNTORYの某商品の宣伝として、「ごま油は酸化しにくい」との研究から始まった成果をみせるため。ちなみに、永平寺では現在まで760年間、朝食のおかゆとごま塩は食べ継がれているとのこと。なるほど、この映画を観るとこんな新発見も。

2008（平成20）年12月5日記